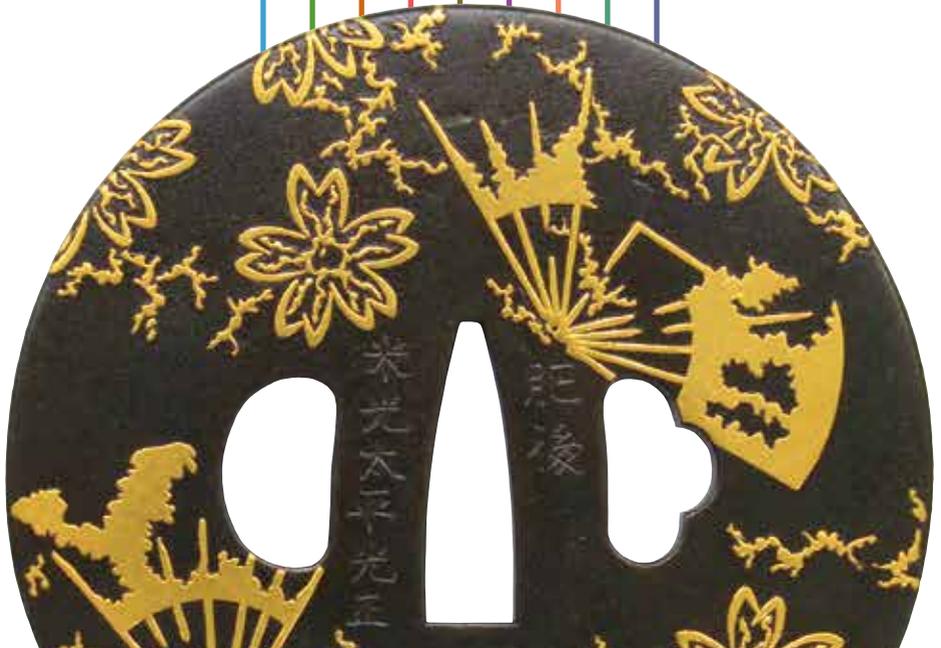
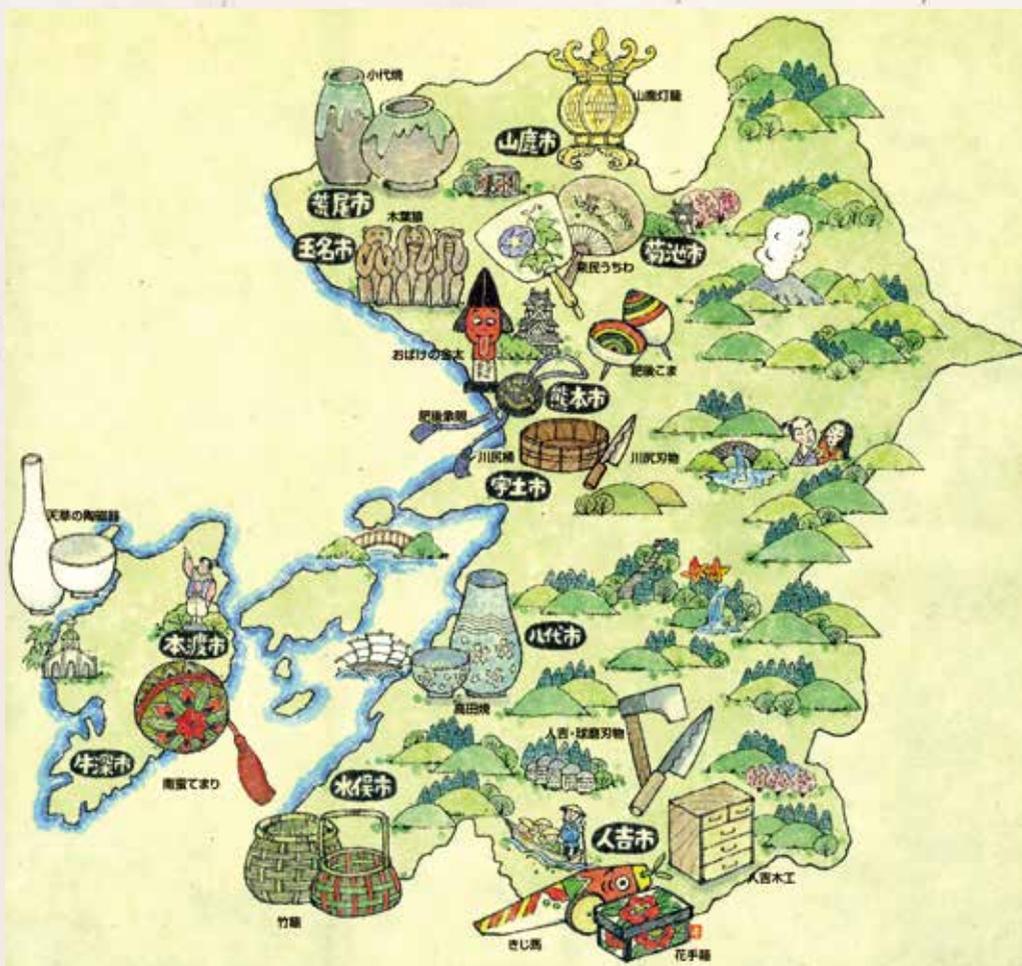


熊本県の
伝統的
工芸品



熊本県には、豊かな自然、職人の技、人々の暮らしの知恵から生まれ、育まれてきた暮らしのなかで使われる工芸品が、今も多く残っています。

作り手と使い手のコミュニケーションからつくられる工芸品は、暮らしのさまざまなシーンに、豊かな表情を与えてくれます。現代の職人の技から生まれるみずみずしい工芸品の「あたたかさ」や「使いやすさ」を暮らしのなかでぜひ楽しんでください。



熊本県伝統的工芸品



熊本県の伝統的工芸品指定要項により指定された工芸品の品目は約90品目に及んでいます。約30年以上の歴史があり、伝統的な技術や技法で作られているものなどが指定の要件となっています。その種類は、金工品、木工品、陶磁器、染色品、紙工品、竹工品、郷土玩具、その他和楽器などがあります。

熊本県は自然と素材に恵まれており、作る人と使う人とのコミュニケーションによって、作ったり作り直したりして土地の人のモノを作るという生産形態が、今なお数多く残されています。他県の優れた伝統工芸技術の多くが、土地の暮らしの道具ではなく大消費地へ売られるための産地となっているなかで、これは極めて貴重なことといえるでしょう。

国指定伝統的工芸品



伝統的工芸品の国指定とは、伝統的技術又は技法が、100年以上の歴史を有し、一定地域で産地が形成(10社、又は30人以上の従事者)されているものなかから法令要件を満たすものについて、国が指定する制度です。

全国では、京焼・有田焼や輪島塗などの200を超える工芸品が指定されています。熊本県では平成15年3月に小代焼・天草陶磁器・肥後象がんの3件が指定を受けました。また、平成25年12月には、山鹿灯籠が本県4件目の指定を受けました。

ひごぞう 肥後象がん



熊本県の工芸品の代表にあげられる肥後象がんは、鉄地に金銀をはめ込み様々な模様を表現する工芸品です。

肥後象がんは、約400年前の江戸時代初期に、鉄砲鍛冶が鉄砲の銃身や刀剣の鐔に装飾として象がんを施したのが始まりといわれています。特に、細川忠興が時の名匠を召し抱えて刀剣金具の製作にあたらせ、技量の奨励をはかったため、鐔や刀装金具類など数多くの名作が産み出され、全国的にも「肥後金工」として高く評価されました。江戸時代の金工には、肥後象がんの始祖といわれる林又七を始めとする林家をはじめ、西垣、平田、志水の4家と幕末の神吉家があげられます。明治維新の廃刀令を受けて刀剣金具の需要が減りましたが、その技術を生かした装身具などが作られるようになりました。

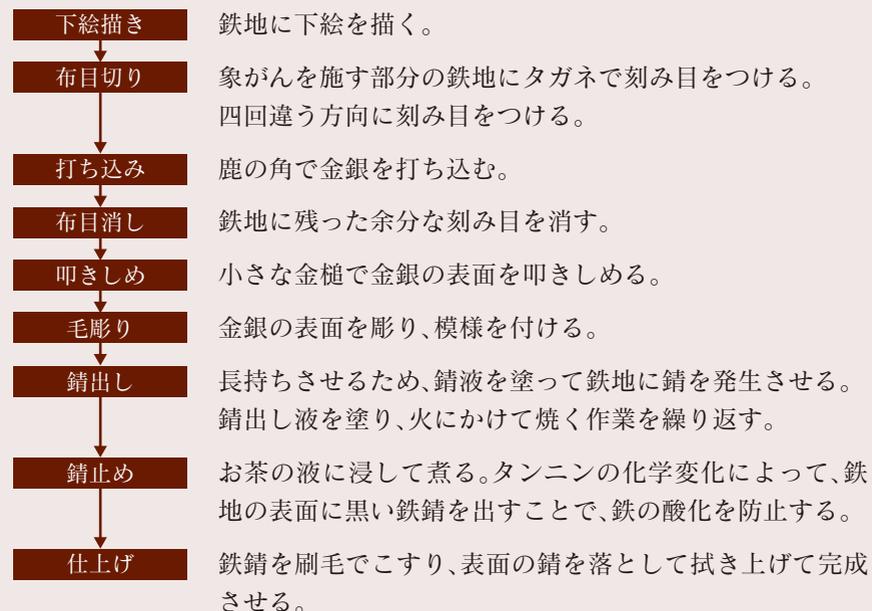
昭和には、国の重要無形文化財保持者に認定された米光太平や、県の重要無形文化財に認定された田辺恒雄らにより後継者の育成がなされ、肥後象がんの技術が伝えられています。

技法には、布目象がん、彫り込み象がんなどがありますが、現在、多くは布目象がんの技法で製作されています。黒い鉄地の中に金銀の装飾がはめ込まれ、武家文化の伝統を感じさせる重厚感・高い品格が感じられる文具や装身具が作られています。

肥後象がんの作り方



製 | 造 | 工 | 程 | (布目象がん)



て う は も の の こ と う けん 手打ち刃物・鋸・刀剣・ ひ ご つば 肥後鐔



かつて各地の農村には生活必需品の鋏・鎌・包丁などを作る鍛冶屋があり、刀鍛冶と区別して野鍛冶と呼んでいました。

熊本市川尻は、室町末期からの鍛冶屋町で、江戸時代には肥後藩の造船所が設けられて、鍛冶が盛んになりました。特に包丁を主力とする川尻刃物は有名です。

人吉市鍛冶屋町は約800年前の鎌倉時代に作られたといわれています。60軒程の鍛冶屋が、平時は農作業の刃物を作り、戦いが始まると武具を作っていました。昭和初期まで多くの移動型鍛冶屋が集まっており、球磨地方から宮崎県にかけての農村を廻って農具や山仕事用の鉋や斧を作ったり修理したりしていました。

その他、宇土市、美里町、八代市などでも手打ち刃物が作られています。

鋸は、現在鍛造による製造が少なくなるなか、人吉市で昔ながらの製造法を用いて作られています。主材料は安来鋼で、鋸の切れ味を増す工夫がなされています。

刀剣



八代市、荒尾市などで製作されています。

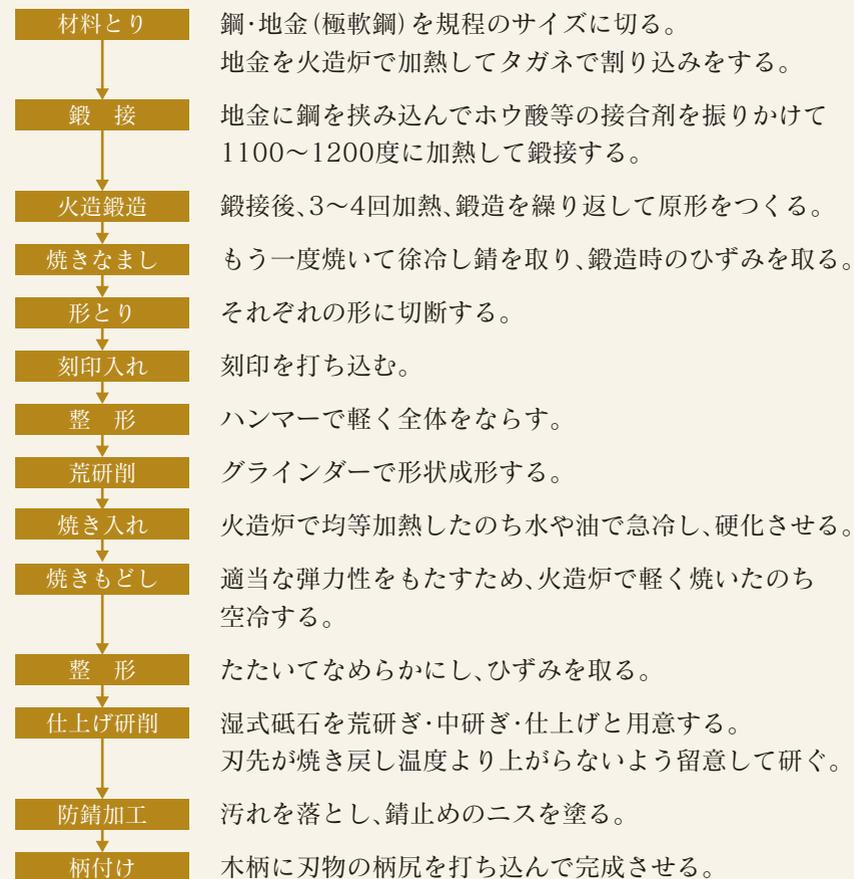
肥後鐔



和包丁の作り方

柔らかい鉄に鋼をはさみ、手打ちで鍛え上げる製法で作られ、鋼があるうちは何度も研ぐことができるため、切れ味を保つことができます。

製 | 造 | 工 | 程 | (割り込み式)



熊本の陶磁器

熊本の近世の窯業は、約400年前に始まったといわれています。1632年（江戸時代初期）、細川家が肥後に入国した際、陶工たちも県内に移り住み各地に窯を築きました。八代の高田焼、荒尾玉名の小代焼は、藩の庇護を受け、茶道の道具を中心に発展しました。その他、松橋焼（宇城市）、肥後藩唯一の白磁窯の網田焼（宇土市）や、水の平焼（天草市）、高浜焼（天草市）、丸尾焼（天草市）などがありました。

しょうだい やき —小代焼—



小代焼は、熊本県北部で約400年前から焼き続けられている陶器です。寛永9年（1632）に細川家転封に際し、豊前より移った牝小路源七と葛城八左衛門が小岱山麓に登り窯を開いたのが始まりといわれています。肥後藩の御用窯として茶道の道具などが焼かれたほか、生活雑器も多く作られました。

鉄分を多く含み小石粒が多い小代粘土に薬灰・木灰・長石などを釉薬として用い、陶器としては高温で焼成されます。味わい深い地釉に流し掛けの上釉がかかる、素朴で力強い作風に特徴があります。

あまくさ とうじき —天草陶磁器—



天草陶磁器は、日本一といわれる良質な天草陶石を使って焼かれる磁器と、地元の陶土を使って焼かれる陶器です。磁器は約340年前に、陶器は約250年前に焼き始められました。純度の高い良質な天草陶石を使った透明感のある磁器や、性質の異なる釉薬の二重掛けの技法を用いた海鼠釉や黒釉の個性的な陶器が多く作られています。

熊本の陶磁器 — 高田焼 — こうだ やき



高田焼は、1632年（江戸時代初期）に現在の八代市で焼き始められたといわれています。細川家が豊前から肥後に国替えとなった際、上野喜蔵が豊前国上野から八代郡高田村に移り築窯しました。別名八代焼ともいわれます。

ミガキをかけた素地に文様を刻み、白い陶土を埋め込む象嵌という技法が使われています。透明釉をかけて焼成し、胎土に含まれた鉄分で碧色に発色しています。上品な色合いと端正な形状が特徴です。

現在は、八代市や氷川町で製作されています。

高田焼の製作工程



- ①成型後、生乾きの時にヘラで文様を彫る。
- ②文様の凹面に白い粘土を埋め込む。
- ③余分な白粘土を削り取る。
- ④素焼きを行う。
- ⑤釉薬をかける。
- ⑥本焼きを行い、完成。

熊本県には、小代焼・天草陶磁器・高田焼のほかにも、多くの陶磁器があります。

悠斗窯



蛸窯



蒼土窯



御船窯



陶器と磁器の違い

- 陶器は「土もの」といわれるように、原料の成分に土が多く、1200度位で焼成されます。素地は軟らかく、浸透性があり、不透明です。
- 磁器は俗に「石もの」と呼ばれ、主な原料は石粉で、1300度以上の高い温度で焼成されます。素地が硬くて白く、半透明で水を浸透させません。

紙工品

江戸時代、熊本の製紙は藩の殖産振興で発展しました。鹿本地方は楮の生産が盛んで、生産された和紙は山鹿傘や山鹿灯籠などに用いられました。八代でも加藤家、細川家の保護を受けて手漉和紙が作られました。明治から昭和にかけては全国有数の産地で県内各地に紙漉き場がありましたが、洋紙の普及に伴い少なくなりました。現在では、八代市と水俣市で手漉和紙が作られています。

宮地手漉き和紙

宮地手漉和紙は、約400年前に現在の八代市で作り始められました。楮の皮を一晩水につけた後、4時間ほど煮ます。棒で叩いて繊維を柔らかくしたものを、糊の成分となるトロロアオイの根を加えて紙漉きを行います。



宮地手漉和紙



手漉和紙



来民うちわ

来民うちわは約400年前に四国の旅僧から作り方が伝えられたといわれています。この地方は和紙と竹の材料に恵まれていたため、うちわの生産が盛んになりました。

1本の竹でうちわの骨を作り、和紙を貼った上から柿渋を塗っています。柿渋は強度を高め、防虫効果があるといわれています。

やまがとうろう 山鹿灯籠



山鹿灯籠は、和紙と糊だけで作られる立体的な構造の工芸品です。細かい部分まですべて中は空洞になっています。

第12代景行天皇の筑紫路巡幸の際、霧に進路を阻まれた一行を山鹿の里人が松明を掲げて迎えたという故事があります。その後、これを記念して松明を行在所跡（現在の太宮神社）に献ずる火祭りの行事が行われていましたが、約600年前の室町時代に、金灯籠を模した紙細工を奉納するようになったのが山鹿灯籠の始まりといわれています。

金灯籠の他、有名な建物や神殿を模した作品も作られます。建物を模した作品は、20分の1か30分の1の大ききで作られますが、作品を低めに置いて見るので、実在感を出すために縦は2割から3割大きめに作られています。



金灯籠

木工品

熊本では、江戸時代から豊富な資源をもとに盛んに木工品が作られており、人吉球磨地方の挽物や箆笥などの家具類、熊本市川尻の桶・樽などが有名です。また、象嵌の技術を施した指物や欄間彫刻などが作られています。



さしもの 指物

木を組み合わせることによって、あまり重くなく、強度があります。複雑な形をした、様々な大きさの品を作ることができます。素材をものさしで正確に計り、各部材を組み合わせて一つの作品を作り上げるので「指物」と呼ばれます。

人吉地方の家具は一枚板を使い、金釘を使わず、剣留工法という技術で木を組んで作られています。美しい木目と堅牢さが特徴です。



ひきもの 挽物

轆轤によって材料を回転させ、それに刃物を当てて削り出し、成形する木工品です。最後に漆を塗り、表面に美しい艶を出し、木目の美しさを際立たせることもあります。椀や盆などの日用雑器などを多数作るのに適している技法です。



まげもの 曲物

薄い板材を熱湯などによって軟らかくし、丸く曲げて器の側面などに利用する木工品です。材料には杉や桧がよく用いられ、接着には糊などの接着剤を用い、桜の皮を紐状にしたもので綴り合わせます。これに底板・盖板などを取り付けて仕上げます。

らん ま ちょうこく 欄間彫刻



楠・銀杏・屋久杉などをノミで粗彫りし、彫刻刀で細かく彫り上げます。厚さ1~3cmの板に透かし彫りをする「薄彫り」と、厚さ7~12cmの厚板を彫り、立体的に仕上げる「厚彫り(籠彫り)」があります。



おけ たる 桶・樽

桶や樽は、檜でつくられています。檜の木片を特殊なカンナで削り、削った木片を金属の輪で組み合わせ、接着剤を塗り、乾かします。かつては、竹ひごなどで輪をつくり組み合わせていましたが、今では、銅でつくった輪も使われています。

竹工品



熊本は豊富な竹資源に恵まれ、農具や漁具、ざる、しょうけのような、荒物と呼ばれる実用品が作られてきました。竹細工の職人たちは、かつては村々を回り注文に応じて仕事をしたり、竹林に工房を構えたりしていました。

八代市日奈久では、湯治客の土産物として盛んに竹製品が作られました。明治時代には他県から教師を呼び、小学校の職業課程で、油抜きした竹で作る弁当箱や祝儀の時に進物用の魚を入れる魚籠などの角籠作りが教えられ、丸いざるなどに加えて角籠も多く作られるようになりました。

その他、天草市本渡町、熊本市でも漁具やざる、花器など生活用具を中心に作られるほか、山鹿市ではクラフトの要素を取り入れたモダンな竹籠も作られています。

ひごさぶろうゆみ 肥後三郎弓



芦北郡芦北町で大正末期から作られている肥後三郎弓は、強さと気品を兼ね備え、弓道界で高く評価されています。

東京の弓師の家に生まれた故・松永重児氏が、大正13年(1924)26歳のときに、素材の竹とハゼの木の豊富さにひかれ芦北町白石へ移り住み、「肥後三郎弓」を作り出しました。京弓と薩摩弓の良さを合わせ持ったところが特徴となっています。

真竹と自然乾燥させたハゼを用い、鹿の皮を煮詰めて作ったニベという接着剤で真竹とハゼの木を交互に貼り合わせて作ります。



郷土玩具

郷土玩具は、身近な材料を使い、こどもへの思いや健やかな成長を願って作られたものが多く、郷土色豊かな玩具が伝承されてきました。

熊本市のおばけの金太、人吉市のきじ馬や花手箱などは個性あふれる玩具です。玉東町の木葉猿のように、縁起物だったものが玩具として有名になったものも少なくありません。八代市にはおきん女人形、板角力人形などがあります。

てまり類は、女性の遊び道具として愛され、江戸時代から武家の婦女子のたしなみとして作られてきたといわれています。

この他、タヌキの置物が4つのコマに分解される彦一こまなどがあります。



おばけの金太

加藤清正が熊本城を築く際、金太という足軽がいて、顔立ちが面白く、人を笑わせることが上手で「おどけの金太」と呼ばれて人気者だったといえます。19世紀の中頃、人形師の西陣屋彦七が金太の伝説をもとにカラクリ人形を作り出したのが原型だといわれ、後に「おばけの金太」と呼ばれるようになりました。

紐を引くと目玉がひっくり返り、長い舌をペロリと出すカラクリが仕掛けられています。



木葉猿

養老7年(723)の元旦に、「虎の歯(このは)」の里に住んでいた都の落人が夢枕に立った老翁のお告げによって奈良の春日大明神を祀り、神社に奉納する祭器を木葉山の赤土を用いて作りました。残った土を捨てたところ、それが猿に化けたという伝説から生まれたものといわれています。この木葉猿は、型を使わず指先だけで粘土を捻って作り、素焼きした素朴な玩具で、元は無彩でしたが、現在は彩色したものもあります。悪病・災難除け、子孫繁栄などのお守りとしても用いられています。



彦一こま

八代地方に伝わる、彦一がいたずらタヌキをとんちで負かす「彦一とんち話」からヒントを得て作られました。

タヌキの絵付けをした置物が、頭・胴・かき・台と尾を組み合わせた4つのコマに分解できます。

郷土玩具



うま はな て ぼこ は こ いた きじ馬・花手箱・羽子板

800年以上前、平家の落人が球磨地方に逃れ、人吉の奥地へ住み着いたとき、都の暮らしを懐かしんで作り始めたと伝えられています。

きじ馬は桐・ダラ・藤・柏などを材料に、形に応じて胴体を作り、黄・緑・赤の素朴な色付けを施されています。

花手箱は、モミ、ヒノキ、杉などの板で作った箱で、白で地塗りした後赤と緑で椿の花が描かれます。

羽子板は山桐の板に山椿が鮮やかに描かれます。人吉で開かれるえびす市などで売られました。



ひ こ 肥後まり

江戸時代から伝わる各地のてまりを参考にして、昭和40年頃から作り始められました。もみがらを芯とし、草木染めした木綿糸で模様を作ります。



じょ にんぎょう おきん女人形・ いた ずもう にんぎょう 板角力人形

おきん女人形は八代市日奈久で桐材に着色して作られています。主に幼女が着せ替え人形やままごとに使うお土産品、飾り物として愛用されてきました。

板角力人形は江戸時代の天保年間に日奈久の嶋ヶ崎という力士にちなんで作られました。桐材の薄い板を切り抜いて作られます。



ひ こ 肥後てまり

芯にへちまを用い、刺繍糸で様々な文様を施したてまりを肥後てまりと呼びます。てまり唄の「あんたがたどこさ」に出てくるてまりはこの肥後てまりといわれています。

せん しょく ひん 染織品



こ がつ せつ く の ほり 五月節句織

約100年前(明治時代末~大正)から、八代市鏡町や熊本市川尻で五月節句織が作られてきました。ボカシや重ね塗りなど手描きの特徴を生かし、武者絵や鯉の滝登りを描いた昔ながらののぼりが作られています。

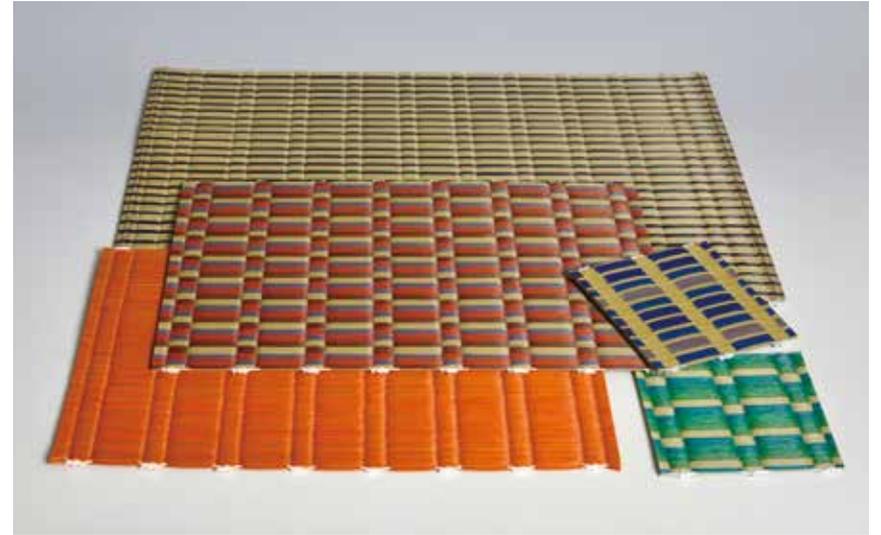
紙布



ろうけつ染



はな 花ござ



熊本県のい草生産は、八代地方を中心に日本一の生産量を誇っています。その八代地方のい草を原料として、畳表とともに花ござが明治時代から織られてきました。

赤、青、黄色など色鮮やかに染色されたい草を用いて織られている花ござは、吸湿性に優れていて肌触りが良く、敷きござや寝ござとして愛用されているほか、ランチョンマットやコースターなども作られています。

や ね かざり かわら ざい く 屋根飾瓦細工



宇城市小川地区で産出する良質の瓦粘土をヘラで形を整え、乾燥した後、磨き焼き上げます。鬼瓦、置物として利用されています。

古寺の瓦を葺き替える時、鬼瓦の裏に製造年月日がかかれていることがあります。それによると200~300年も前の鬼瓦が雨風にさらされながら現在も使用されていることがわかります。

従来、宇土・小川地区では、良質の瓦粘土が産出され、それを利用した生産技術が伝承されています。熊本に石膏型が入ったのは昭和初期で、近年は多様化、高級化の時代になりつつあり、型が変わったもの、品質、美観ともに良い手作りの品が求められています。また、装飾置物としての需要も多くなっています。



かざら ざい く かざら細工



かざら細工は、山野に自生するかざらを編んだもので、籠やザル等の日常生活用品が作られています。最近では部屋の飾りとして使われるものが多くなりました。

植物繊維であるツタ、かざらを使った籠は、古くは約5000年前の縄文時代前期の貝塚から出土した例があり、古代から籠を編む技術があったことを実証しています。

このかざら細工は、主に背負い籠、腰籠などの生活用具づくりとして、阿蘇地方では江戸時代末頃から昭和20年代頃まで盛んに行われてきたものです。化学繊維を使った籠におかれ、山の植林が進むとともに、原材料不足でほとんど作られなくなっていますが、壁飾り、花入れなど高い人気があります。

さめ がわ うるし ぬり ざい く
鮫皮漆塗細工



仏具の漆塗りと刀装の技術をもとに、サメやエイの皮に漆を塗り重ね、研ぎ出して模様を表した装身具です。

家業である仏具店で、仏具の漆塗りに従事していた深水基氏が、古くから伝わる鮫皮刀装の技術を用いてペンダント・ブローチなど鮫皮細工のアクセサリーを昭和40年代に作り始め、現在にいたっています。

たい こ
太鼓



太鼓は、神社仏閣などの祭礼、地方の祭、農村の雨乞いなどに用いられてきました。特に、宇土地方は雨乞いに大太鼓が使われました。

ケヤキの木などを削り抜いたものに、均等に削った牛の皮を張って作られます。手作業で削り抜いた太鼓の胴の内側は波型になり、叩いた時に音が共鳴して味わいのある響きがでます。

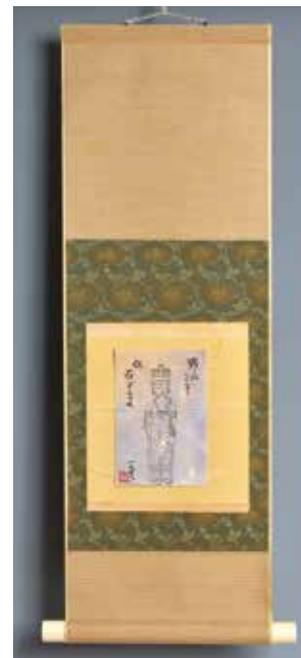
じ うた さん げん こま ぼち
地唄三絃の駒・撥



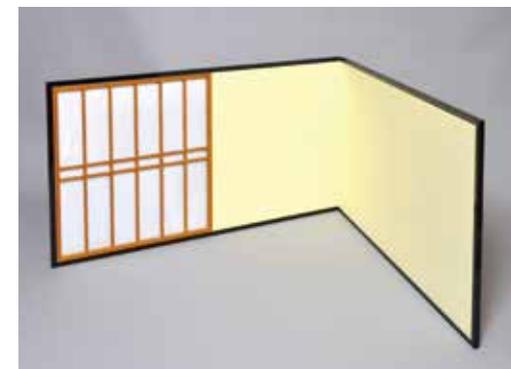
地唄三絃の駒・撥は、江戸時代末期から明治にかけて日本一の地唄の名人といわれた長谷幸輝検校の招きによって、初代の橋本嘉八が、明治のはじめに福岡県から宇土に移り住み、名人の芸に接しながら駒と撥の製作技術を開発しました。

駒は、水牛の角に金・銀・鉛を埋め込んで作り、撥は水牛の角や象牙の台に、撥先にべっ甲を使い、演奏者に合わせて形や大きさなどを調整し、工夫を重ねて作られています。

ひょう ぐ びょう ぶ はり こ ざい く
表具・屏風 張子細工



表具・屏風



表具は表装とも呼ばれ、書や絵画を掛軸、額、巻物、屏風、襖などに仕立てる伝統技術です。



張子細工

肥後象がん

Q 肥後象がんの金・銀にくもりが出てきたけれど
手入れはどうすればいいですか？

ANSWER

肥後象がんに打ち込まれている金には、24金のほかに、青金といわれる金と銀の合金があります。この青金は銀と同じく時間が経つと酸化してくもりが出てきます。その場合は、くもった部分をお手持ちの消しゴムでこすると、輝きが戻ります。

Q 肥後象がんなどの金工品の深みのある味を
出していくには、どうすればいいですか？

ANSWER

それは、何と言ってもよく使いこなすことが必要です。使い込むことによって金属の良さがさらに出てきます。また、よく布で乾拭きし、長い年月をかけることです。



手打ち刃物

Q 和包丁が錆びないようにするには、どうすればいいですか？

ANSWER

使用後はよく洗って水分を取るため乾いた布でよく拭いてください。熱い湯をかけると乾きが早くなります。特に汚れが気になる時にはクレンザーで磨いてください。毎回使用すると錆びにくいものです。

Q 和包丁はどのようなものを揃えたらいいですか？

ANSWER

1本の場合は、刃渡り15cm前後の文化包丁が使い良いです。出刃包丁、刺身包丁、薄刃包丁の3本を揃えると良いでしょう。

Q 素人でも失敗しない研ぎ方はありますか？
また、どれくらいの間隔で研いだらいいですか？

ANSWER

その製品と同じ角度で研ぎます。刃先はあまり急にせず、両刃の場合、両面とも同じ回数で研ぐことです。少し切れ味が鈍ったかなと感じたら、その都度、中研程度の家庭用砥石で研いでください。

Q 包丁を選ぶときは、どんなことに注意したらいいですか？

ANSWER

包丁は、全体の形状が美しく、重量感があり、持ってバランスが良いもの、そして、仕上げが平らでゆがみのないものを選んでください。手打ちの包丁は、手にしたときのバランスがうまく取れています。

陶磁器

Q 釉薬(うわぐすり)とは何ですか？

ANSWER
木灰、長石、藁灰などを精製して水を加えて液状にし、それを調合したものからなっています。素地の表面を覆い、液体や気体を不透過性にするとともに、素地を強くします。また、美的効果を出すのに用います。

Q 焼き締めとはどんな焼物ですか？

ANSWER
成形体に釉薬を施すことなく、吸水性がほぼ、または全くなくなるまで焼き固めることをいいます。良く知られる焼き締めには、備前焼があります。

Q 使い始める時、どんな点に注意したらいいですか？

ANSWER
洗剤での洗浄、乾燥を行い、ひび割れの確認などをしてください。釜や鍋に陶磁器を入れ、徐々に煮込んで沸騰させる熱処理も有効です。高台の処理が必要であれば、ヤスリで擦る簡単な作業で済みます。

Q 少量生産品、中量生産品、大量生産品はどう違うのですか？

ANSWER
少量生産品(一品もの)は、作家活動を中心としている人によって生産されるものです。中量生産品(工房もの)は、手作りを主として従業者が2~3人の規模の工房によって、主に高級品として生産しています。大量生産品は、いわゆる機械ものことで、機械による低価格日用品として大量に生産されているものです。

Q 使い込んで味がでるといのはどういうことですか？

ANSWER
陶器の場合、釉に貫入が入り、そこへ茶渋などが入って色艶が変化します。また、吸水性のある素地の場合も茶渋が入って変化します。自然に使っている間に落ち着きのある色や光沢が出るのが「味がでる」ことに通じます。

木工品

Q 製品が適正価格であるかどうかを知る方法がありますか？

ANSWER
家具の場合、板の厚さ、無垢材か合板か、塗りが漆かそうでないかなどを見ます。その他一般的には、手作りか機械加工か、全体的な着眼点は、デザイン、感触、仕上げの技術などです。

Q 質の高い製品と、そうでない製品とを見分けるコツはありますか？

ANSWER
家具や筆筒などは、引き出しの仕込みが良く扉の開閉がスムーズであり、材料の使い方が良いかなどに注意します。また、裏板や引き出しの底板など見えないところにしっかりとした材料が使われているもの。一般的には、手作りか機械加工か、塗装ムラや傷の有無などに着眼しますが、使う人にとって心地よいものであるかどうかは質の高い製品の要素です。

Q 取り扱ううえで絶対にしてはならないことはありますか？

ANSWER
家具や筆筒などは直射日光に当てたり、重いものを乗せたりしないことです。化学雑巾は使わず、時々乾いた柔らかい布で空拭きしてください。塗り製品はたわしを避け、白木は水に長時間つけないこと。椀類を電子レンジや食器洗い機で洗うことはやめてください。

Q 漆器を使うときに守らないといけないことはありますか？

ANSWER
あまり難しく考えず、「生き物である漆にとっては私たちの肌が不快に感じることを避けてやればよい」と覚えておけば、割と気楽に漆器と付き合えると思います。具体的には、日光などに長くさらさない、電子レンジや食器洗い機には入れない、磨き粉で洗ったり、硬いものと一緒に扱わないなどに注意します。

竹工品

Q 製品の質を見分けるコツはありますか？

ANSWER

産地名が明らかなものを購入するのが一番です。白竹(油抜き竹)製品は表皮に艶のあるもの、漆塗り製品は艶と形、デザインが参考になるでしょう。輸入品の多くは表皮を使わずに内皮を合成樹脂塗料で固めたものが多いので、手に取って曲げるとバリバリという音がします。このような製品は、竹そのものの質が弱く、長持ちしないものが多いです。

Q 製品が適正価格であるかどうかを知る方法がありますか？

ANSWER

材料と工程により異なります。例えば、廃材にする竹を使って合成塗料で塗装したものは一見同じに見えますが、耐久性に乏しく安価です。一般的には信用ある店で購入されれば問題ありません。



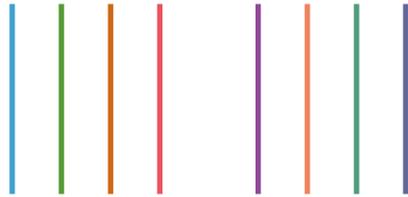
写真撮影：坂本徹



- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 月曜日(祝日または休日の場合は、その翌日)
12月28日～翌年の1月4日
- 観覧料 工芸館2階企画・常設展示室のみ有料
一般：210円(140円)
大学生：130円(100円)
高校生以下は無料、()内は、20名以上の団体料金
- 交通案内 伝統工芸館は、熊本城不開門(あかずのもん)正面にあります。
① 路線バスでのこま館は「市役所前」下車徒歩約7分
② 路面電車は「熊本城・市役所前」下車徒歩7分
③ 熊本城周遊バスは「KKRホテル熊本前」下車徒歩約2分
④ 熊本駅からは②、③の方法で、阿蘇くまもと空港からは
空港リムジンバス熊本駅行き「通町筋」下車徒歩約10分

一般財団法人 熊本県伝統工芸館

〒860-0001 熊本市中央区千葉城町3番35号
TEL 096-324-4930/FAX 096-324-4942
E-mail : info@kumamoto-kougeikan.jp
URL : <http://kumamoto-kougeikan.jp>



発行者 熊本県

製作 熊本県伝統工芸館

平成30年3月発行